
哀しげな天使からの淡い恋愛

彩乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀しげな天使からの淡い恋愛

【Nコード】

N4043B

【作者名】

彩乃

【あらすじ】

組織は全滅して解毒剤は完成したーしかしコナンは元（新一）に戻らずにそのまま小学生生活をおくり続けたその理由は同じ境遇に遭った（同じようにAPT×4869を飲まれた）哀とともにすべてをやり直したから・・・ーそんな事を全く知らない蘭は新一を待ち続けるコナンと哀は日々生活を過ごす度に二人の恋はさらに深まるいつまでも待ち続ける蘭に罪悪感を感じながら実っていく辛い恋。果たして二人は幸せな恋を得られるのでしょうか？この話はコ×哀です抵抗のある方はご遠慮下さい

戻って来ない恋、そして新しい恋愛へ（前書き）

初めての連載です

不安ですが最後まで書き上げます

戻って来ない恋、そして新しい恋愛へ

蘭

「えっ…………どうして……。」

涙ぐんで絞り上げるような声で受話器越しでボソツとつぶやいた。そこに一人立ち尽くしているのは毛利探偵事務所に在宅している“毛利蘭”

電話の相手は蘭が半年以上待ち続けている“工藤新一”

・・今は、“江戸川コナン”として偽りの声で電話に向かって会話を交わす。

(新一)コナン

「悪いな、蘭…俺…。」

蘭

「聞きたくない!!!!」

コナン

「……………!!!!!!」

蘭

「もう言い訳なんて聞きたくないよ……………」

なんで帰って来ないのよ……。

例の組織の件は片付いたんでしょ?

新一が探し求めていた事件はもう終わったんでしょ?

・・もう戻ってこれるんでしょ…………?

だったら戻って来てよ!!!」

蘭は泣き崩れそうな声で叫んだ。

コナン

「終わっていないねんだよ……。」

蘭

「えっ……………？」

どういうことよ？

終わっていないってどういうことよ……？」

コナン

「まだ終わっていないねんだよ……。」

俺は探偵なんだ

まだ残っているいろんな事件すべてを片付けなければいけないんだよ……。

もちろんこれから起きるすべての事件を解いていくつもりだ。

それだけじゃねえ……！！

俺は、黒の組織の奴らと戦っている間に一生やらなければならないことを新たに見つけたんだよ。

もう俺は……蘭の元へ戻って来れねえ……。

一生帰って来れねえ。

悪いな……。今までありがとう蘭」

蘭

「新一！！何いって……。」

プチッ……………

蘭

「あっ、ちよっと新一！！」

ツーツー……

電話は一瞬にして切られた

蘭

「新一！！新一！！しんいーち！！」

叫んでも機械の新一の声は返ってこない
ただ電話の途切れた音だけが耳に響く

むなしく鳴り続けるけたましい音

――その音のせいで周りは一瞬にして淋しくなる。

周りには誰も居ない。

窓に映る真っ赤な夕日が悲しそうな私を照らす。

落ち着かない気持ちを癒やすためにソファ―に座る

蘭

「ひつく…ひつく…」

これじゃなんの意味もないじゃないよ…。

最初からこうなるのが結果だったとしたら半年間も新一を待ち続けた意味がないじゃない…。

新一は…結局私の元へ帰って来なかったじゃないのよ…。」

淋しそうに独り言を次から次へとつぶやく。

蘭は抑えきれない気持ちが溢れ出してしまう。

泣くたびに涙の量が増えていく

――ボタン――ボタンと大粒の涙が溢れる

そんな蘭を夕日は赤く染まった状態で照らしながら見守っていた。
夕日をバックにして大粒の涙の雫を流していた

- - -そろそろ夕日は沈む頃... - - -

コナンは、博士の家へ向かった

コナンは蘭に辛い思いをさせてしまったことに罪悪感を感じながら
急いでいるかのように博士の家まで超スピードで走る

- - -そのスピードは今まで以上にはるかに速いスピード

博士の家に着いた頃は『- - -ゼイ - - -ゼイ』と息を切らしていた。

一旦荒い息が止めるためちよっと休憩してから博士の家にインター
ホンまで手を伸ばす。

硬直したような指で思い切ってインターホンを押す。

ピンポン.....

家のインターホンを押した瞬間に音が鳴った。

そしてその家の住人の博士が慌てたように床をバタバタと踏みなが
ら向かってくる。

すぐに白衣をまとった科学者みたいな老人が飛び出してきた

コナン

「オイ、博士入っていいか・・・？」

家の玄関先で待つコナンは白衣をまとった老人に向かって“博士”と呼び唐突に自分の要望をいい出す

博士

「新一…どうしたんじゃ・・・？」

例の薬（APTX4869）ならまだ…」

哀

「あら、解毒剤なら完成したわよ。」

声は急に聞こえてきた

博士はすぐに後ろを振り向いた

博士

「哀君……。」

コナン

「灰原……」

二人の声は見事にハモった

哀

「お二人さん・・・？何驚いているのよ・・・？」

哀はくすつと笑った。

そしてポケットから“何か”を取り出そうとする

哀が握りしめたものは普通に見ればただの薬

哀

「はい、工藤君…」

やっと完成したわよ……。
これが解毒剤よ
さあ、受け取りなさい。」

博士

「哀君、何時の間に完成したんじゃ？」

哀

「やっと今日完成したわ。
何ヶ月かかったけどね……。
さあ、工藤君受け取りなさい！！
探偵事務所の彼女のところに行くんでしょ？」

哀はコナンの近くでA P T X 4 8 6 9の解毒剤を差し出す。

コナンはその解毒剤を自分の間近で見せ付けられて躊躇ってしまう
ついこの前の自分だったら“解毒剤を受け取ること”に躊躇わなかったけど今の自分は迷いを見せてしまう

それは、解毒剤をもらう目的がもうないから……

“蘭の元へ戻るため”に解毒剤をもらうことになっていた
――しかしその蘭と自ら逢えたくしてしまったから解毒剤などもう意味がない

哀

「どうしたの？
あなたが今一番欲しい解毒剤よ……。
これで彼女と逢えるのよ……。
解毒剤は要らないの？」

何気なく彼女は手を差しのばす

哀に解毒剤の事をいわれるとさらに躊躇ってしまう

しかしコナンにも哀にいたいことがある

“ 勇気を振り絞ろう ”

そう思って次の言葉を云う準備をした

コナン

「悪いけど、その解毒剤受け取れねえよ…。」

哀

「えっ……どう……して？」

コナン

「俺、今蘭の事何とも思っていないんだよ…。」

確かに組織を追いかけていた当時は蘭の事を愛していた
でも今現在は違う。

組織と戦っている間に “ シェリー ” と云う元組織の一員に出会い俺
の運命は変えたんだ！

そして組織を壊滅の為に一緒に協力してもらいやつと自分の本当の
素直な気持ちに気づいたんだ。

今の俺は灰原お前が好きだと云うこと……そしてお前とともにも
う一度小学生としての生活をしたんだ。」

哀

「……………？」

コナン

「なあ、灰原いや哀……
もう一回だけ云うぜ。」

哀

「えっ、何を……？」

コナン

「もう一度本当の小学校生活をやり直さねえか？」

戻って来ない恋、そして新しい恋愛へ（後書き）

えっと、続きは多分1月下旬か2月の1日あたりだと思います
初連載ですが評価や感想をいただけると嬉しいし今後の参考になります
宜しくお願いします

新しい恋愛への第一歩（前書き）

えっと、これから先は彩乃ワールド式妄想多めの「哀を書いていくつもりです

彩乃のね…「哀はね妄想多めのよ（爆）」
新蘭派には多分無理っばいかかも

今回は序の口です（*^ー^*）

彩乃の勝手な妄想の世界ですいません

m(_ _)m

新しい恋愛への第一歩

コナン

「もう一度本当の小学校生活をやり直さねえか？」

コナンは真剣な眼差しを哀に向けながら言った。

博士が隣りに居ることも気にせずに哀だけに集中して見つめる。

――そう、数分間の沈黙の時間^{とき}まで

哀は真剣な眼差しを自分だけにおくるコナンに少しドキッとしたほんのちよつとだけ真っ赤な林檎のように顔が赤くなった。哀は、一瞬我を忘れて、コナンしか見えていなかった。

コナン

「哀、どうしたんだ・・・？」

そつと優しい声をかける

その優しい声が再び聞こえて我を取り戻す

（はっ、何彼にドキッとしていたのよ…。

彼には、幼馴染みの蘭さんが居るじゃない…。）

コナンに惹かれて自分に対して気付かれないように軽く顔を叩く。

哀

「な、なんでもないわ…。」

ねえ、それより工藤君、貴方は一体何をいつている…の？」

語尾がやや躊躇^{ためら}ったような口調になった。

哀は、コナンに甘えたがっているような自分に対して再び軽く顔を叩く。

コナン

「そのまんまの意味だよ…。」

もう一度本当の小学生としての生活過ごさねーか？って聞いているんだよ……。

それに俺はもう工藤新一に戻る気はねえんだ…。」

悲しみを抑えながら決意をしたような真剣な眼で見た。

哀にとってその凜々しくて優しい眼差しには痛さを感じた。

哀

「な、何言っているのよ…。」

貴方自分が言っていること分かっているの？

工藤新一に戻る気がないって…

蘭さんが未だに貴方を待っているのよ…。」

コナン

「分かっているさ。」

勿論、蘭には悪いという気持ちでいっぱいだよ…。

でもな、俺の心を動かしたのは哀、お前なんだぞ…。

俺は今、“哀だけ”を愛している！！

今までの人生不幸だったお前を今度こそは幸せにしたいと思っている。

だから……だから」

必死になって全てを云おうとする。

その必死な気持ちは決して偽りなんかじゃない

哀にはその気持ちは痛い程伝わった。

しかし彼が“自分と一緒にになりたい”だなんて、そんなことを云われる度に胸が痛くなる。

哀

「わかったわ。

貴方の気持ちは充分伝わってきたわ。

でも、私に幸せになる資格などない

私は毒薬を開発して貴方を含め危害を及ぼしたのよ

幸せを奪ったわ

私には貴方の幸せを取り戻すために解毒剤を完成させることしかできない……。

そして、あなたを幸せにするための準備は整えた。

それでも、私は貴方の幸せを奪った罪悪感から逃れられないのよ……。

本当は辛い！！

貴方の優しさでさえ辛いのよ……。」

語尾のトーンが強まった

——その声は叫び声に近い

いつもの冷静さが欠けて心が激しく揺らいた

博士

「あ、哀君・・・」仲介に入った博士の声など全く聞こえていない

哀の高鳴った鼓動はなかなか止まらないまま

この瞬間が哀の人生の中で一番鼓動が激しかった

新しい恋愛への第一歩（後書き）

彩乃です

果たして蘭はどうやって幸せにするのだろうか？

2人は結ばれるの？って彩乃もね結ばれて欲しいのよ
彩乃ワールド式妄想コ哀でも書きますわ

では、評価などないただくと嬉しいもんです

痛くて辛い哀

高鳴っている哀の鼓動

――彼女は、今までを振り返り、罪悪感に押しつぶされる

今までの哀と比べて激しさが増した

もう止まらないほど鼓動が鳴り続けている。

コナン

「哀、どうしたんだ・・・？」

博士

「哀君、いったいどうしたんじゃない？」

コナンと博士が大声で叫び哀を心配する。

哀

「なんでも……無いわ。」

途切れた声でボソツとつぶやいて、いつものクセで地下室へと逃げるように歩く。

コナン

「あ、ちよつと…哀、待て!!」

コナンは必死になって地下室へ行こうとする哀を止めに入る。

博士はコナンの様子をただ果然として見尽くしているだけ

地下室まで血相を変えて走る

バタバタとスリッパの音が地下全体に響く。

その音で哀はすぐに振り向いた。
地下室へ入るのを引き止められた。

コナン

「よう、哀……。」

哀

「工藤君、一体何の用なのよ…。」

言っておくけど私には、幸せになる資格なんてないわ。だって貴方を薬で小さくさせた上に大切な時間を奪ってしまった。

そして、貴方だけじゃなく蘭さんにも辛い思いをさせてしまった。

――蘭さんが貴方を待つ羽目になったのは私が開発した薬で貴方が小さくなってしまったから……。

私のせいで蘭さんまでの幸せを奪ったっていうのに私が幸せになるなんてそんな資格全くないわよ。」

いきなり追い込まれたような口調で突っかかってきた。

コナンは驚くことなく冷静に哀へ云う言葉を考えていた。

コナン

「大丈夫さ。」

もし誰かがお前が幸せになることを批判したとしても俺は絶対にお前を幸せをしたいと思っている。

勿論蘭についても幸せにしたいと思っている。

原因は俺が哀に恋してしまったから……

帰ってこれないなんて告げてしまったから

悲しんでいる蘭も救ってやりたいっていう気持ちはあるんだ……

！

今の一言に哀は顔を赤らめた。

――このまま彼と2人つきりになりたい

一瞬彼の世界に入り込み我を忘れていた。
ちよつと間コナンに惹かれていたものの、すぐに我を取り戻してクールな彼女に変わった。

哀

「でも幾ら貴方が私を愛していても蘭さんは未だに貴方を待っているのよ……。
目を覚まして蘭さんの元へ戻って行ってやりなさいよ……。」
心では思っていないことは言葉になって出てしまう。
本当は自分と一緒に居たいと思っても所詮『禁断の恋』
実るわけがないと思っていた。

哀

「蘭さんは、お姉ちゃんにも似ているから特に幸せになって欲しいのお姉ちゃんのように優しい人なのに不幸になって欲しくないわよ……。
お姉ちゃんの分まで幸せになって欲しい。」

今の蘭さんにとって幸せっていうものは貴方が彼女の元へ戻ってくること

彼女はそれを求めているから……

貴方は彼女の元へ行きなさい。」

その言葉を呟いた哀の頬から涙がこぼれる。

やはり思っていないことを云うのは辛い

哀の辛さは増していく。

哀が悲しんでいる姿を見てコナンは一方的に抱擁をした。
そつ、力強く離れられないぐらいに

哀

「なっ／＼／」

幾ら2人つきりになったといえどもいきなり抱きつかれると気恥ずかしい。

哀の顔は真っ赤になる

しかし、彼の温もりを感じて気持ちが和らいできた

コナン

「云っただろ？俺が今好きなのは、哀何だよ。」

哀以外の奴には興味ねえんだよ・・・

それに俺はもう蘭と二度と会わないって約束したんだ。」

禁断の恋をしてしまったことを気にしずに関き直った。

ずっと哀を抱擁する。

そう、激しくー強く

哀が落ち着くまでずっと

痛くて辛い哀（後書き）

彩乃です。

次の展開が上手くまとまりませんが頑張ります
彩乃にコメントをお願いしますネ

蘭のために…

強く激しく抱擁する。

哀はコナンのいきなりの抱擁に動揺する

哀

「工藤君／＼……。あなた何を……。」

哀は、顔を赤らめて呟く。

（どうして彼は……。いきなり抱擁するの？

でも、何だか気分が落ち着くわ。本当はいけないけどずーっとこのままでいたいなあ。）

心底で激しく葛藤する。

コナン

「哀、落ち着いたか？」

哀

「えっ、ええ……。。」

照れくさそうに俯く

そして、俯いてコナンから離れる。

本当は、コナンから離れたくない

彼から離れることを拒んでいる。

鼓動が異様に高鳴る。

コナンに魅了された哀は、顔を照らせてぼーとする。

ーもうコナンの優しさに包まれたい気持ちだけしかない。

地下室のドアが揺れ動く。

哀の高鳴る鼓動と同じぐらいに……

コナン

「オイ、哀顔が赤くなっているぜ？」

哀は俺の事好きなのか？」

少々からかい口調になる

そして、コナンの声ではっと気づいて我を見返る

そして、思ってもいない事を口ずさむ

哀

「な、何いつているのよ……」

別に好きだなんて……」

また照れくさそうに俯く

コナン

「えっ、何だつて？」

哀

「まあいいわ……」

それより貴方、蘭さんの事本当に幸せに出来るの？

そんなにまで云うんだから絶対に幸せにしてよ……」

蘭さんはお姉ちゃん的身代わり何だから……」

貴方と付き合う条件は蘭さんにとっての幸せを築く事よ……。分かった？」

コナン

「よく分かったぜ……」

蘭を幸せにしてやらねーとな、

そもそも俺が原因で蘭を哀しませてしまったからな。

でも今日は、博士んちに泊まってもいいか？

久しぶりに哀と一緒に居たいんだよ…。」

自分の気持ち全てを爆発させるように語った。
その気持ちは抑えきれない

哀は俯いた顔を上げて何気なく話し始める。

哀

「それは駄目よ。工藤君

蘭さんは今、貴方が居ないから悲しんでいるのよ。

もう二度と“工藤新一”としての貴方の姿で傍に居てあげることが
無理だけどせめて“江戸川コナン”として傍に居てあげなさいよ…。
蘭さんの支えになるのは貴方しかないのよ」

コナン

「そうか…。」

じゃあ、しっかりと蘭の事見守りに行くぜ…。」

コナンはすぐに風のように玄関まで走って外へ行った。
目指す先へと向かう為にスピード全開で…。

博士

「はて？新一、一体どうしたんじゃ？」

博士は首を傾げる

哀

「探偵事務所に戻っただけよ。」

突然、博士の近くまで来た。

博士

「哀君、何時の間に此处に…それより何を話していたんじゃ？」

哀

「別に何でも無いわ。大した事無いわ」

哀は再び速やかに地下室に戻る

博士

「はて！？何じやろうか？」

――探偵事務所

「はぁはぁ」

息を切らしたコナンは蘭を心配しながらコソッと蘭の部屋を覗く

部屋に居る蘭は俯いて大量の涙を流している

コナンもドアの前で悲しそうな顔をして俯く

（蘭・・・悪い。）

そしてさらに罪悪感を感じた。

蘭のために…（後書き）

彩乃です

更新が遅れてしまいました

申し訳ありません

m(_ _)m

コナンは蘭の心配もしていますよ。

さて、蘭を幸せにできるか？

次回へ続きます

感想、トかお願いしますネ

己の誓い（前書き）

えっと、さっきの話の次の日の話です。

サブタイトルは、本文の最後に関係あります

己の誓い

――翌日――

今は、朝 学校に行く前

コナンは学校の支度でバタバタとする。

蘭

「コナン君、ちょっと。」

コナン

「何？蘭姉ちゃん・・・」

蘭

「新一の行方って知ってる？」

コナン

「えっ!？」

蘭

「あ、いや何でも無いわ。」

コナン君行ってるじゃない。」

コナン

「うん、行って来ます。」

探偵事務所をすぐに出た。

ドアをおもっいきり閉めた後、深く溜め息を吐く。

コナン（なんか、蘭のあの言葉そして、あの表情妙に引っ掛かるな

あ…

なんだか悲しそうな雰囲気がつもに増して漂っている…。
（やっぱり蘭の様子がおかしい。）

コナンは探偵事務所のドアにもたれ掛かる

そして、蘭に何らかの不審さを抱く。

元太

「オーイ、コナン」

光彦・歩美

「コナン君・・・!!」

少年探偵団の3人が大声で叫ぶ。

コナンはふっと外で待っている少年探偵団の近くまで走る。

そして、少年探偵団の目の前に現れる。

コナン

「ーよう…お前ら・・・。

まだ三角関係なのか？」

元太

「うるせーよ。

お前は、灰原と付き合っているんだろ？

俺も歩美と付き合いたいけど、でも光彦が諦めてくれねーからしよ
うがねえじゃん

そもそも光彦って灰原も好きじゃねえのか？」

光彦

「そりゃあ、以前は灰原さんの事好きだったけど、でもコナン君にはかなわないですから……」。

それに僕歩美ちゃんの事も好きですから……」。

それに歩美ちゃんだって僕の方が好きですよね？」

歩美

「うん……。光彦君も元太君も好き」

ちなみに光彦は以前好きだった哀を諦めて歩美だけを好きになった。そして、歩美は以前好きだったコナンを諦めて光彦と元太の2人も好きになった。

理由は光彦の場合：（コナンの方が哀の事を知り合っているから……）

歩美の場合：（哀の方がコナンの事を知り尽くしているように見えたから自分はかなわないと思ったから……）

——そして、相変わらず元太と光彦は歩美の事が好き

一応、複雑な関係のまま

コナン

「そういえば、あい、じゃなくて灰原は……？」
辺りをキョロキョロとして見渡す。

歩美

「あ、そういえば哀ちゃん居ないわね。
まだ来て居ないみたいね……」。

哀

「あら、呼んだ？」

突然のように哀が、みんなの前に現れる。
みんなはいきなりの出現に少々驚いた。

コナン

「なっ、お前何時の間に…」

哀

「今此处に来たのよ。ねえ、それより工藤君…」

やや小さめの声で耳打ちをする。

哀

「蘭さんについてだけど、本当に幸せに出来るの？」

コナン

「ああ、大丈夫だよ。もう既に手は打ってあるさ。
蘭を幸せにしてやるわずかな方法はあるんだ。」

（蘭、悪いな…俺の自分勝手な行動のせいでお前を悲しませてしま
つてよ…。

でも、二度とお前の元へ帰れないけど“蘭の望む幸せ”にだけはし
てやるぜ。）

コナンは蘭を幸せにする。

―自分でそう誓った。

己の誓い（後書き）

彩乃です

今までの分挽回っていうことで二話更新しました

きつと意味分からない話になっているんでしょっね…。

突然視点ですからね…。

まあ、取りあえず今回は、コナンが蘭を幸せにすることを誓う此がテーマです

少年探偵団のネタは、一応歩美と光彦はコナンと哀を諦めたっていう警告です（＾Ｏ＾）

評価などなど貰えると嬉しいでっす

突然の訪問者（前書き）

サブタイは、内容を読んでから…
お願いします

突然の訪問者

――今は、下校の途中

いつものように、少年探偵団の3人組と後ろにはコナンと哀はそれぞれ雑談しながら自分の家へと向かう。

相変わらずコナンと哀は、こそこそしながら会話を交わしている。

哀

「ねえ……。」

コナン

「ん……。何だ。」

耳打ちする程度の小声でボソツと呟く。

哀

「貴方、本当に蘭さんを幸せに出来るの？」

コナン

「あん？」

コナンは哀の質問に対して首を傾げて眉を顰めた。

哀は、次の発言を呟く為に一呼吸ついた。

哀

「だって、蘭さんを幸せに出来るなんて信じられないんだもの……」

。
そうでしょ？

蘭さんにとって幸せは、貴方が”傍に居る”事なのよ。
でも、貴方は今、蘭さんと別れた…。
蘭さんには貴方は居ない。

――恐らく蘭さんは、貴方が別れを告げた時悲しんだでしょね……。
そんな悲しみに溢れ出てような蘭さんを幸せになんて出来るなんて
信じられないわよ…。」

コナン

「えっ、その事についてか？

ああ、大丈夫だよ…。」

哀

「えっ、なんでそんな事言い切れるの？
何か幸せにする方法でもあるの？」

コナン

「ああ、とりあえずちよつとした策ならあるけどな。」

哀

「何？そのちよつとした策って……。」

コナン

「ああ、それについては後ほど分かるさ。」

哀

「！？」

哀は何が何だか分からず首を傾げた。

コナン

「まあ、いいじゃねえか。それより探偵事務所に寄らねーか？」

哀

「??」

哀にはコナンの言いたい事の意味が分からなかった
眉を顰めて首を深く傾げる。

コナンは哀を探偵事務所へと誘導するように一歩一歩歩く。
「――それにつられて哀も探偵事務所まで足を運ぶ。」

探偵事務所に着いた玄関に着いた瞬間、“子供らしさ”を蘭に見せる
為に表情をにこやかに変える。

“これで蘭に怪しまれない”

そうタカを括ってから事務所のドアをゆっくりと開ける。

蘭

「あら、コナン君と哀ちゃん…。どうしたの？」

コナン

「いや、別に何でも無いよ。たまたま遊びに来ただけだよ。」

蘭

「ふーん。」

何か深々しい瞳で二人を見つめる。

何かありそうな気もするけど、特に気にはしていなかった。

蘭

「ねえ、哀ちゃんちよつと話があるけど…いい？あつ因みに、哀ちゃんだけでいいよ。」

哀

「ええ…。」

哀は蘭が誘導するがままにコナンから遠ざかる。

蘭

「哀ちゃん…」

哀

「ん…何かしら？」

蘭は哀にしか聞こえない程度のトーンまで下げる。

蘭

「哀ちゃんってコナン君の事好きなの？」

哀

「なっ／＼どうして？」

哀はやや大きめな声を張り上げて叫んだ。

遠くに居たコナンはすぐに反応する。

何やら驚いたような表情をする。

コナンは耳を傾けて二人の会話を聞き取ろうとする。

蘭

「だって顔に書いてあるんだもの。」

“コナン君の事が好きだつてさ。”

哀ちゃん、コナン君の事好き何でしょ？」

無理やりのように質問攻めする蘭

——哀は戸惑ってしまふ。

哀

「えっ、えっと……。」

つついっ籠もったような口調になる。

『何て云えばいいのか』思い付かない。

哀は戸惑っている間に『ギイイ』と軋んだようなドアの音が響く。

二人の様子を伺っていたコナンもドアの方へ注目する。

二人の視線も一気にドアに釘付けになる。

「蘭さん、コナン君久しぶりだね。」

ドアを開けて中に入って来た人物はさりげなく呟く。

蘭

「えっ、新出先生。」

目の前に居る人物に対して驚いたような顔をして思わず叫んだ。

突然の訪問者（後書き）

えっと、何故か登場した新出先生
其の理由は次回に関係します

突然のお誘い

蘭

「えっ、新出先生…。」

アポなしで突然のように出現した新出先生に驚く。

哀はこそつとコナンの方へ行く。

哀

「ねえ、新出先生つて今日来る予定だったの？」

小声でボソツと呟く。

コナン

「ああまあな…。」

哀

「でもなんで彼女は新出先生が来た途端に驚いているのよ。」

コナン

「蘭には新出先生が来る事を伝えていなかったんだよ。実は俺が新出先生を連れてったんだよ。」

哀

「えっ、何故貴方はそんな事を」

コナン

「ああ、あれは新出先生なら俺の代わりに蘭の事を幸せにしてやる事が出来るだろうと思ってな、新出先生に蘭の事を任せただ。」

哀

「貴方、何時の間に…！」

コナン

「昨日、事務所に帰る前に新出病院に行ったんだよ。どうやら新出先生はいつもの如く女子について困っていたからな。だから俺が『蘭姉ちゃんと付き合えばいいじゃない』って云ったんだよ。」

哀

「で、どうなったの？」

コナン

「でも『工藤君が居るんじゃないか』って云って俺が其の返答に対して『新一兄ちゃんは二度と帰って来ないって蘭姉ちゃんが云っていたよ…』って言い返したんだ」

哀

「ふーん。」

哀は其れだけ云って二人の方へと視線を向ける。――どうやら蘭と新出先生は世間話をしている

新出

「あの……蘭さんって工藤君の行方知っていますか？」
唐突な質問に蘭は戸惑ってしまう

蘭

「あつ、いえ知りませんけど……。」
苦々しく嘘を吐く。

新一は二度と帰って来ないという衝撃的な真実を信じたくない――其の話題に触れて欲しくない

其の気持ちがあつて“知らない”と嘘をつく。
俯き加減な姿勢になる。

新出

「でも、コナン君が『蘭さんが工藤君が居なくなつたって事』云つていたんですけど……」

蘭

「えっ？」

コナン

「（あつ、やべー。）あつ、あれは偶々玄関前で蘭姉ちゃんと新一兄ちゃんとの会話を聞いてしまつて『新一兄ちゃんが帰つて来ないとか何とか』蘭姉ちゃんが云つていたのを聞いたから……。其れで悲しそうな蘭姉ちゃんを救うには新出先生が、救えるかなあと思つて……」

コナンはアタフタして話の流れを誤魔化そうとする

二人は

「ふーん」

とさり気なく呟く。

蘭

「で、話は何でしょうか？先生」

新出

「すみません。

肝心な事を言い忘れました。

蘭さん明日ってあいていますか？」

蘭

「ええ、一応。」

新出

「では、明日トロピカルランドに行けないでしょうか？
勿論、コナン君達も…」

蘭

「えっ、良いですけど…なんでまた？」

新出

「すみません。押し付けで…。蘭さんが何やら落ち込んでいるように
なんで気分転換にトロピカルランドに行くのもどうかと思いますし
て…。」

其れともやはり僕では工藤君の代わりには成らないですね…。」

蘭

「いえ、別に良いですよ…。明日ですね…。分かりました。」

新出

「そうですね。良かったです。では、失礼します。」

新出先生は即座に事務所から外へ出た。

その時の蘭の心底は不安定だった。

新出先生の自分に対する微妙な気遣いにときめく。――新一に以外
にときめくなんて事は有り得ない

しかし今の蘭の心底では新一か新出先生どちらが好きなのかってい
う事で葛藤が始まっていた

突然のお誘い（後書き）

新出先生が、蘭にトロピカルランドに誘いました

作者からの解釈で蘭にとつての幸せは新一が傍に居ることしかし新一は、蘭と二度と遭わないって告げた

これで蘭の幸せはなくなった

でも、しかし新一の代わりの人なら蘭を幸せに出来るのではそう解釈しました

それが新出先生かと思つてそうしました。

あつ、そういえばユーリ先生の少年の心救う女神も新出先生と蘭の組み合わせだったような気がする

ごめんなさいユーリ先生m（――）m

Wデート1日前

――今は、夜

完全なる闇に染まった景色が周りを包む。
暗い景色は完全に釘付けになる。

闇のように暗い景色を拝みながら今日起きた事を思い出す。

蘭の頭の中には今日突然のように現れた新井先生の事がぐるぐると巡ってくる。

不安と迷いが、量りきれない程巡る。

ただ窓ばかりを見つめる蘭

――何やら哀しげな表情をして突っ立っている。

そんな蘭の様子をコナンは一言も声をかけずに黙って見ていた。

コナン（蘭…。）

蘭

「ねえ、コナン君。」

コナン

「何？蘭姉ちゃん。」

蘭

「コナン君は羨ましいなあと思ってさ。」

コナン

「えっ、何で？」

蘭

「だって、最も逢いたい人といつでも逢えるじゃない。ほら哀ちゃん…。」

コナン

「あ、あいつは別に…。」

蘭

「私なんてこの世で最も逢いたい人と逢えないんだもの。」
蘭は途切れた声で悲しそうに呟く。

コナン（蘭…。）

コナン

「ねえ、それって新一兄ちゃんの事？」

蘭

「えっ、なんで？」

コナン

「だって、蘭姉ちゃんがそんなにも哀しむなんて新一兄ちゃんの事以外に無いもん。」

蘭

「ええ、そうね。」

やっぱりコナン君には分かっちゃうだなあ。新一はもう帰らぬ人になってしまったのよ。理由も云わずにね…。」

コナン

「（蘭……。悪い。俺の自分勝手にこんなにもお前を哀しませていたとはなあ。）あつ、あの蘭…」

蘭

「でも、考えているわ。」

コナン

「えっ…。」

蘭

「新井先生も結構優しい所があるし、良くなって。思うんだ。」

コナン（蘭……。）

一瞬救われたような心が落ち着く。
でも少しだけ罪悪感を抱く。

蘭

「で、コナン君。今何って云おうとしたの？」

コナン

「えっ、何のこと？」

蘭

「ほら、“あつ、あの”って云ったじゃない。あの後何か云うつも

り何でしょ？」

コナン

「ああ、あれは……」

コナンは蘭から目を逸らして言葉を考える。

コナン

「新井先生ならきつと新一兄ちゃんの代わりになるよって云いたかったただだよ。新一兄ちゃんは帰って来なくても新井先生だって同じぐらい優しいと思うよ。」
とっさに誤魔化すように呟く。

蘭

「うん、そうだね。でも、新井先生についてあともう少しだけ考えさせて欲しいの…。」

って、それより明日の身支度をしなきゃいけないわね。御免ね。コナン君、折角明日楽しみにしていた所で愚痴っちゃてさ。」

コナン

「別に良いよ。」

蘭

「コナン君は、哀ちゃんと仲良くしてね…。じゃあ、支度するわ。」

――蘭は、コナンに向かって手を振り部屋から出る。

そして、自分の部屋へ向かう。

コナンは蘭に声が聞かれない事と視界に入らない事を確認してボソツと呟く。

コナン

「意外と早く蘭を幸せにするチャンスが来たな。」
独りで淋しそうに呟いた。

嫌な風が何か波乱を起こす前兆かのように透き通って入る。
流石のコナンでもその“何かの波乱”の正体はわからなかった

「明日、計画実行だ。」

何やら仲間らしき人物に向かって電話越しで喋っている
――帽子で顔を隠した怪しげな男が事務所の近くで立ちすくんでいた。

電話を切ったあと妙な人物は研がれたナイフを手に持ちそして、笑った。

Wデート1日前（後書き）

えっと、最後について何かあります
さて、ナイフを持った人物とは？

Wデートの待ち合わせ

ー翌朝、新井先生と待ち合わせ場所公園で待機する。

コナンと哀は退屈そうに公園のベンチにもたれかかり座る。

蘭は二人に背を向けていろいろと戸惑いながら別のベンチに座り込む。

蘭

「ハア……。」

溜め息を吐いてぼおとする。

肝心の新井先生来るまでの間3人はそれぞれベンチに座り込みそして、待っていた。

哀

「ねえ、工藤君？」

コナン

「何だ。」

哀

「本当に新井先生が蘭さんを幸せに出来るのかしら……。」

コナン

「今日は、わからねーけど一応トロピカルランドで遊ぶっていうのも悪くねえだろ？きっかけ作りつてもんだよ。」

哀

「ふーん。」

蘭（やっぱりコナン君と哀ちゃん楽しそうに喋っているわね。私は新一とはもう二度と会話を交わす事が出来ないのに…。あの二人羨ましいなあ。）

蘭はぽつんとして俯く。

ーコナンは蘭の様子にすぐ気付く。

コナン（蘭…。やっぱり未練があるのか？）

蘭

「ねえ、コナン君、哀ちゃん。」

コナン&哀

「えっ、何？」

蘭

「あのさ、トイレ行くからちょっと待ってとってくれる。」

蘭は悲しそうな瞳で二人を見つめて呟く。

今にも泣きそうな悲しげな表情で…。

吸い込まれそうになる深い瞳でただひたすらに見つめる。

コナン

「うん、分かった。」

いつもの子供の口調を演じて哀と一緒に居る事さえも辛い。妙に明るく振る舞っている自分になんだか違和感を抱く。

蘭はトイレに行くふりをして二人に見えないようにひっそりと歩く。
――全ては自分の悲しそうな瞳を覆い隠す為に……

蘭（まだ自分の中では新一を忘れられないわね。どうしてかしら・
・。あんなにも優しい新井先生の事をもっと知りたいっていう好奇
心もあるのに……。どうしても新一の事が頭に与儀ってしまっ

――もう新一は過去に好きな人だったのにね……。）
トイレの前で泣き崩れる蘭

彼女は、俯いた表情を覆い隠すようにして涙を流す。

一応、コナンと哀には俯いた姿を見せないようにする為に体勢を作
るように工夫する。

蘭が俯いているその時に足に何か生温いものが飛んできた。
『ピチャ』という効果音を立てながら……

蘭

「えっ、何？何なのよ……。」

蘭は生温いものの正体を確かめる為に足を確認した。

蘭

「えっ、何これ？血じゃない！」

蘭は即座に血が飛んできた方向へ振り向く。

そして辺りをキョロキョロと見渡す。

蘭が振り向いた方向には、赤い点の行列が並んでいる。
さらにじつくりと辺りを見渡す。

――すると視界にはナイフで刺された血まみれの死体が映った。

蘭

「きっ、キャアアアア……。」

残酷な状態で置かれる死体思わず大声で叫ぶ

その声は、コナンと哀にも聞こえていた。

まさか殺人犯に悲鳴が聞かれてしまう事も考えずにひたすら大声で叫ぶ。

犯人A

「見たな。お嬢ちゃんよ…。俺がコイツを殺した所を見たな。」

蘭は怯まず威勢よい態度をとる。

蘭

「何よ…。アンタなんですぐに倒してやるわよ。アアアア…。」
蘭は拳に力を入れて犯人に突撃しようとする。

そして、犯人Aに向かつて蹴りを入れようとする。

持ち前の俊敏さで相手に向かつて素速く蹴り飛ばす。

蘭の蹴りは見事に入って顔を蹴られた犯人は地面へと落ちる。

犯人Aは失神する。

この瞬間蘭は“勝った”。そう思い込んでいたのが後の祭り
その時に気付かなかった

まさか背後から妙なマスクを付けた犯人Bが、クロロホルムつきの
ハンカチで口を押さえつけてくるとは、思わなかった。

これには、流石の蘭も抵抗出来ない

蘭（何？何よ…。このクロロホルムは？駄目ね…。抵抗出来ないわ。よし、こうなったら…）

蘭は悔しそうな表情をしてクロロホルムを嗅がされてしまう。――
睡眠ガスを嗅がされてしまったのが原因で地面に落ち、そして眠りに附く。

『ボタン』という音を響かせて蘭は倒れる。

犯人B

「ちっ、相方がこの小娘のせいで失神しちゃったな…。まあ、いい。この厄介な小娘は眠りについただろうから殺せばいいだろうしな。」
犯人Bは、ボソツと呟いて蘭を担いで誘拐する。

その頃、コナンと哀は蘭の悲鳴で駆け付けてトイレの方へと向かう。
コナンは、

「蘭姉ちゃん！」

と何度も叫ぶ。

（あれ、返事が無い。）

コナンは慌ててトイレの方へ行く。

其処に着いた瞬間コナンの表情は探偵の表情へと変わった

――その理由は、目の前に血まみれの死体と居る筈の蘭が消えていたから…

Wデートの待ち合わせ（後書き）

えっと、蘭の云ったよしこになったらの発言はカギになります
駄文もすいません

誘拐された蘭

目の前には血まみれの死体そして、其処に居る筈の蘭が消えていた。其れを確認したコナンは探偵の顔へと変わった。トイレの壁に付着している血は残酷さを感じた

コナン（何なんだ？この状況は…蘭も居ねー。それに何故か被害者に見覚えがある気がする。

一体誰だったけ…。

トイレに行った筈の蘭が何故居ないんだ？考えられるのはただ一つ！蘭が殺人犯に誘拐されたって事だ。ーっていうかあの都大会優勝の蘭をそう簡単に誘拐出来るのか？）

コナンは深々しく疑念を抱きながら考え込む

考え込んでいる間に新出先生が近くへと走って来る。

彼は息を荒らしてコナンと哀の元へ行く。

新出

「遅くなってしまっ…ってこの状況はどうしたんですか？」

コナン

「どうしたもこうしたもねえ…。蘭が誰かに誘拐されたんだ！」

新出

「えっ、なんでまた。」

コナン

「其れはわからねー…。ーでも2つわかる事が有る

一つは蘭が誘拐された動機はトイレの前に居る被害者を殺害する所

を目撃したから…。

2つ目は、此の事件の犯人は複数犯だと云う事。蘭を力ずくで誘拐するなんて事は無理に近い。

「其の蘭を誘拐するっていう事は蘭の隙を見て背後から動きを止めなければならね！」

勿論、力では蘭を押さえるのは先ず無理だろう…。

何とか蘭を眠らせる為にクロロホルムとかをかせたんだろうな…。

「

コナンは自信満々に笑みを浮かべて子供の顔を無くし、そして威勢のいい態度を取る。

新出先生はそんなコナンに対して驚いたような表情をする。

「いつもと違った雰囲気の大人数びたコナンに少し疑念を抱く。

新出

「ねえ、コナン君…。君は一体そんなに大人びているんだ？何故君は何でも知っているんだ？」

コナン

「何でもは知らないさ、有るものと有るものを組み合わせた時、其れがたった一つの答えに導かれるだけの事さ。」

探偵の顔をして得意げに呟く。

「其れはまるで工藤新一と同じような雰囲気を漂わせて…。

冷たい風が吹いて来る。

此は、何かの前触れだと伝えているかのように…

風に軽く飛ばされて一瞬だけ手帳らしきものが目の前で留まった。

コナン（ん。何だ？あの手帳は…）

コナンは眉を顰めた

哀

「工藤君…どうしたの？」

哀は小声で耳打ちして顔を覗き込む。

コナン

「なんか、手帳らしき物が一瞬風で飛んで見えた気がするんだ。—
体何なんだ？」

コナンは疑念に思い風で飛ばされた手帳を拾い上げる。
そして、すぐに手帳の中身を見る。

コナン

「こ、此は……！！」

哀

「えっ、工藤君どうしたの？」

コナン

「暗号だよ…。恐らく蘭の居場所についてのな。」

『小　　α　　—　　—　　ë　　—　　—　　』

手帳にはこう書かれていた。

誘拐された蘭（後書き）

えっと、今日は一気に5話投稿しました（・-・ハ*）／

暗号は本当にしょぼいですって云うか暗号じゃないって云うぐらい

に（――――）

蘭は誘拐されました

こんな駄文ですけど返信しますので評価お願いしますネ（^O^）

／

暗号とは…（前書き）

暗号とは…って云っても暗号じゃないですね…。

暗号とは…

『小 y a — — i e — — 』

手帳にはこう書かれていた。

新出

「コナン君、其の手帳に書かれた文字は一体何？」

コナン

「此は、多分暗号だと思うけど…。」

哀

「此の暗号の意味わかった？」

コナン

「いや、何の事かわからねー。ただわかる事は蘭は、わざと犯人に眠らされた振りをしただけさ。蘭なら空手で抵抗出来たのに全く抵抗しなかったには眠った振りをしたからだよ…。」

哀

「でも、何故彼女は眠った振りをしたのかしら…。得意な空手で犯人をやつつければいいのに…。」

コナン

「決まっているだろ？わざと犯人に捕まって俺達に警察に通報する猶予を与える為…。蘭なら一人で犯人をやつつける事は出来ただろうけど犯人が複数居たら厄介な事になって警察を呼ぶにもなかなか呼べねーだろうから、わざとクロホルムを嗅いだふりをしたんだよ。恐らくその時に仲間が監禁場所を云ったのを聞いたと思われる。」

「

コナンは自慢げに説明する。

そして、暗号らしき奇妙な文字に目を向ける。

――眉を顰めて探偵の顔に成りきって考え込む。

――時間が、無い。

そんな追い詰められたような状況にもはや言葉が出ない。

ただ焦りや苛立ちが増してくる。

風の吹きわたりもさらに強くなり余計に暗号を解く事に焦り出す。

コナン（なんか落ち着かねーな。蘭を一刻も早く助けたいって気持ち
ちが絡まってやがる。冷静にならねーとな。先ずこの暗号は蘭が犯
人の目を盗んでとっさに書いた物だよな。――とっさに……？まて
よー。）

コナンの頭はさらに回り出した。

その様子に新出先生が即座に気付いた。

新出

「コナン君、その暗号について何か解った？」

哀

「その不可解な暗号が解けたのかしら……？」

コナン

「いや、暗号でも不可解な謎でも何でもねえよ。そのままの言葉だ
よ。」

哀・新出

「――どう云う事？」

コナン

「先ず此の右端の『――』は、何か怪しまれないように横書きにした物だと思われる。あとの文字は『α、ë、й』などの普通のアルファベットだと云う事が証拠だ。『――』だけ万が一犯人に読まれた時に分からないようにする為に書かれた文字。此が横書きだとすると縦に起こすと『T』と読める。最初の『――』の棒だけ濃く塗りつぶされているのは、大文字だと主張する為。」

哀

「なる程、つまり『――』は『T』って事ね…。」

『小NαT-ëT』になるけどどう読むの？」

新出

「うーん。読むにも読めないけど…。」

コナン

「逆から読めばいいと思うよ…。普通は文字は左から右に読むけど、右から左にローマ字の様に読んでいけば解ると思うよ…。」

新出

「右から？右から読むと『T-ë-I-TαN』って読むだけ…。そうか、『ていたん』だ！！『帝丹』！！」

哀

「『帝丹』は、小学校、中学校、高校、大学とあるけど左端に『小』って書いてあるから『帝丹小』に監禁されているって訳ね…。」

問題は、帝丹小の何処に監禁されているのか？それがまだ解けないわね…。」

コナン

「問題は其処何だよ…。確か帝丹小って云えば監禁として見つか

りにくい場所があったような気がするんだが…。確か蘭が小学生だった頃隠れた場所……何処だったけ？」

コナンは首を傾げて眉を顰める

そして記憶を辿ろうとする。

コナン

「そうか！！体育館の椅子をしまう場所！！確か昔蘭は其処に隠れたような気がする。あんな所普通なら監禁している事に気づかない筈。帝丹小の中で『あの場所』が一番監禁している事を気付かれない。あくまでも憶測だか可能性は零では無い。

――まずは、帝丹小に行こう！恐らく蘭の監禁場所は其処だ！！」
コナンの口調は途中”工藤新一”のようにになる。

完全に小学生だと云う事を忘れて探偵に成りきっている。

新出

「じゃあ、コナン君行こう！！」

哀

「蘭さんを助けないとね…。」

二人は別にコナンの口調に違和感なく会話を交わす。それよりも一刻も早く蘭を助ける為に帝丹小に向かう事で頭がいっぱいだった。

――コナン達は即座に走った。もの凄いスピードで…

――目的は一つ！！

目指す先に見える帝丹小に向かう為に…
そして、蘭を救い出す為に…
ただひたすら走った。

暗号とは…（後書き）

久しぶりに更新しました
スキー研修から帰ってきた彩乃です^^
今日はやけに筆が動きます
連続で書きます。

向かう一つの場所へ

コナン達は、向かう。

――ただひたすらに帝丹小学校へ。

『蘭を助ける事』それだけを頭に刻み込んで無我夢中で走る。

そして、一歩一歩足を踏み出す度に近付いてくる

――帝丹小学校に…

コナン・哀・新出

「ハア、ハアハア……………」

必死に走ったせいか妙に息苦しい。

みんなして呼吸は整わない。

壁にもたれ掛かって荒い息を吐く。

コナン

「き、休憩している暇はねえ…。早くしねーと蘭の身に危ない。1分1秒でも早く犯人を倒さねーといけねーな…。」

哀

「ええ、そうみたいねえ…。一応貴方の当てずっぽうで体育館に行ってみようかしら…。」

コナン

「当てずっぽうは余計だったの。」

コナンは哀に聞こえないような声で軽口を叩く。

新出

「それじゃあ、行きましょか!」

コナン

「そうだな。でも其の前に警察を呼ばねーとな…。」

コナンは、電話を出して小声で警察に電話をする。
新出

「コナン君は、一体何をしているんだ?」

哀

「彼は今警察に電話をしているのよ…。彼の電話が終わったら体育館に行きましょー。」

電話をしている間にこそそと喋る。

コナンは焦った口調で背を向け警察に電話する。

そして、電話の会話が終えた後、すぐに切って体を半回転させる。

コナン

「じゃあ、そろそろ誘拐犯狩りにでも行くか!」

先頭に立って自信満々な笑みを交わす。

哀

「ええ、そうね…行きましょー。」

軽くクスツと笑う。

そして、コナン中心で体育館の方へと走り出す。

――体育館

蘭（コナン君達気付いてくれたかな？あの文字に…）

蘭は犯人に手足縛られた状態

椅子をしまう所は狭すぎて窮屈

少々心配もしていたけどきつと自分を助けてそして犯人を倒してくれると希望を抱いていた。

コナン君なら『あの程度の文字なら解る』だろうと期待もかけていた。

―犯人達の任務が終えた後（誘拐犯した後）の満足感による高笑いが響いてきても特に気にならなかった

犯人A

「あの厄介な小娘を誘拐して正解だったな…。手足縛られているからいつでも殺せるからなあ。」

犯人B

「全く其の通りだな…。しかも今ならクロロホルムでぐっすり眠っているだろうからなあ。充分殺せるぜ。ハッハッハ！！」

犯人達は高笑いする。

もう自分達は勝機を得たと確信したばかりの表情を見せる。

そのせいか荒立たしく走る足音に気付かなかった…。

コナン

「其処までだ！！」

突然大声を張り上げる。

犯人達の耳元まで伝わるような大声

流石に犯人達も声に気付く。

犯人達

「誰だ！お前達は！」

その場には3人居た。――コナンが先頭に立ってキック力増強シューズのスイッチを入れてから口を開く。

コナン

「江戸川コナン…探偵さ…。」

犯人達

「ハハハ、餓鬼が何を…！直ぐにやっちまえばいいんだよ…。」

犯人達はナイフを持ってコナン達に突進しようとする。

しかし、コナンは既にサッカーボールを射出ベルトから取り出していた。

コナン

「餓鬼だからってなめんじゃねえよ！此でもくらえ！！」

力を込めて渾身の一撃を喰らわせる。

あまりにもスピードが速いせいか犯人達に逸れを受けとめる事は出来ない。

犯人達は驚いて目を見開けながら倒れていく。

犯人達が倒れていくと同時にサッカーボールの空気が抜けていく。

コナン

「ふう、何とか犯人は倒せた。」

少し安心した気分に至っていた。

哀

「此の体育館に蘭さんが居るのね…。貴方が蘭さんを助けてあげるのよ。」

哀は新出先生の服を引っ張り出して云う。

新出

「えっ、どうして僕が？」

哀

「決まっているじゃない…。蘭さんは少なからず貴方にも好意を抱いているのよ。多分まだ工藤君の事も忘れられないと思うけど、昨日の貴方の優しさは彼女に影響したと思うわよ。此処で貴方が蘭さんを助けて彼女に自分が幸せにしてあげるってアピールしてやりなさいよ…。」

直ぐに新出先生の背中を押して体育館のドアを開けるように進めた。先生は、息を一旦ひき殺してドアへと手を近付ける。

新出（蘭さん、今から貴女を助けます。）

心底で何度も唱えてドアをゆっくりと開ける。

蘭が無事である事を祈って…

告白と告白（前書き）

本文を読んでから…

告白と告白

新出先生は、飛びかかるように体育館の中へ入る。
一刻も早く蘭を助ける為に…

荒い息づかいをして体育館の椅子をしまう所までいく。
新出（蘭さんは、無事かな？）
心底で迷いと不安を抱きながら蓋を開ける。

一秒一分たりともまばたきもせず中を確かめた。
目を凝らしてしっかりと手足縄で縛られている人物を確認した。

蘭

「先生…。」

驚いた顔で目の前に居る人物の顔を覗くように見る。

新出

「蘭さん、今から助けます。」

そういつて蘭の周りに縛られている縄を外す。

縄から解放された後、蘭は息苦しいペースから出た。

蘭

「ふう、助かった。」

一旦解放された事から安心した。

少し時間が経ってから状況を把握する。

先生の後ろにコナンと哀が居る事に気付く。

そして、後ろのコナンに向かって喋りかける

蘭

「ねえ、コナン君あのさ…犯人達は…それと警察に電話した？」

コナン

「犯人達は倒したよ…。因みに警察にも通報したよ…まあ、後は時間の問題かな？」

一応、一見落着だね…。」

哀

「まあ、後は蘭さん次第だけだね…。」

哀は蘭に向かって視線を送る。

新出

「……………」？

蘭

「……………」

——蘭には哀の送った視線の意味が分かったけど少々迷いが詰まっていた。心底で葛藤をしていた。

蘭（どうしよう。なんだか私の為に先生が助けてくれた事でこんなにもドキドキしている。まるで新一の時と同じぐらいに…昨日の何気ない心遣いにもドキドキしていた。なんかはつきりといえない『好き』だという気持ちに変化している。こんな短い間で彼の事を……）

不安と緊張に押しつぶされるような複雑な気分になる。

『ドキドキ』の鼓動が高まる。

哀

「自分の素直な気持ちを伝える事は大切なのよ…。」
励ましのような声が耳元まで伝わってくる。
”こんな簡単に恋に落ちてしまってもいいのか”
そんな迷いを全て吹き飛ばしてくれそう。

蘭

「あの…先生……」

顔を赤らめながら照れて云う。

新出

「どうしたんですか？蘭さん…」

先生に声をかけられてさらに顔を真っ赤にする。

「ー」もう好きだと云えない”そう一瞬思いかけた時哀の言葉を頭
の中で巡らせる。

そして、もう何もかも忘れて全てをぶつけるように口を開いた。

蘭

「あ、あの…私…新出先生の事が好きです。前は新一の方が好きだ
ったけど、昨日から貴方に対してドキドキしてしまうの。私が本当
に悲しんでいる時に気遣ってくれた事…嬉しかったの…。嬉しくて
涙が出そうだったわ。今日だって私を助けてくれて嬉しかったの…。
今、どうしても新出先生の事が好きです。」

ついつい勢いで自分の全てを話す蘭
一瞬だけ我を忘れていた。

我を取り戻してから自分の云った言葉を思い出して照れ出す。
照れている顔を軽く隠す。

チラッと先生を見ながら反応を気にする。微妙な沈黙な時間が怖かった。

新出

「僕も蘭さんと同じ気持ちですよ…。」

蘭（えっ…？）

高まる鼓動が一瞬にして止まった。
心臓まで止まる感じがした。

新出

「僕も蘭さんの事好きですよ。今まで蘭さんの事ずっと好きだったけど、蘭さんには工藤君が居るから僕が『諦めなきゃいけないなあ』と迷っていたんです。でも、蘭さんも僕の事を好きになってくれて嬉しかったです。」

――新出先生は一旦息を呑み込む。

新出

「蘭さん、有難う御座います。そして僕も蘭さんの事好きです。」
正面を向かって直接告白する。

二人を包むように暖かな光が体育館の中へと入ってくる。幸せそうな笑みを浮かばせる

――蘭の瞳に迷いは一つもなかった。

輝いた瞳をして新出先生と会話を交わす。

そんな蘭を見てコナンは『ふっ』と笑った。

コナン（幸せそうで良かったぜ。）
安心したような表情になる。

哀

「此で私達もね…。」

コナン

「あん？」

哀

「私も自分の気持ちに素直にならないとね…。」

コナン

「へ？」

哀

「あのね、工藤君一回しか云わないから聞いていて。――私工藤君の事が好きです。」

コナン

「へ？」

哀

「だから、一回しか云わないって云ったじゃない。」

コナン

「冗談だよ…。俺も哀の事が好きだよ…。此から一緒に本当の小学生生活を何事も無く過ごしていこうぜ。其れともう一度云う。」

哀

「えっ…。」

コナン

「俺は哀の事が好きだ。」

告白と告白（後書き）

コナンも哀も先生も蘭も告白してしまいましたね…ってこんなでいいの？

では、引き続き宜しくお願いします

新しいスタートに向かって（前書き）

告白後の話です

新しいスタートに向かって

警察は30分後に体育館に来て誘拐犯2人組を逮捕する。

――誘拐犯2人組が一人の男を殺した動機は、以前銀行強盗が遭った日に仲間の被害者が裏切って警察に通報しようとしていたから…。裏切った仲間に対する口封じとしてあの公園で仲間を呼び出して刺殺したとの事だ。

その現場を偶然見た蘭はターゲットになって蘭はそれを利用してわざと誘拐された。

此が今回の事件のあらまじだった。

2カップル体育館で共に告白を終えた。

暖かい光に包まれながら外へ出る。

――そして、トロピカルランドへと向かう。

――トロピカルランド

今日もまた賑わった様子

――大勢の人が四方八方色んな場所に集まっている。

冷たい風は全く無く日差しがさしている。

手を額に当てながらキョロキョロとしながら歩く。

新出

「暖かくなりましたね…。」

蘭

「でも、その方がいいですよ…。丁度、遊び日和ですし…」

新出

「そうですね…。」
先生は軽く笑った。

哀

「最近に何処で遊ぶのかしら？」
トロピカルランドのパンフレットを手に持って呟く。

コナン

「そりゃあ、ジェットコースターからだろう。」
満面の笑みを浮かばせて軽々しく呟く。

哀

「えっ、何で？」

コナン

「決まっているだろう？俺が蘭と遊んだ時に一番思い出となった遊び場はジェットコースターだからな…。其れに…」

哀

「其れに…何なの？」

コナン

「あ、いや。別に大した事ねえぞ。」
あたふたとして手を交差する。

コナン（其れに、俺と一緒に乗った時のように苦い思い出のままに

したくねえからな…。せめて新出先生と乗る時ぐらい楽しませねー
とな。)

哀

「ねえ、工藤君…。」

コナン

「ん…。」

哀

「さっきの言葉って本当なの？」

コナン

「えっ？」

哀

「本当の小学生生活で過ごしていこうって…」

コナン

「ばーろ。本気じゃなきゃ二度も同じ言葉言わねーよ…。」

哀

「あら、本気なのね…。じゃあ私が好きっていうのも本気なのね…」

コナン

「あつたりめえだろ。俺は哀が好きだ！此からも宜しくな…。どんな苦悩も絶対に乗り越えて見せるからよお。」

自信満々な態度で笑みを浮かばせる。

蘭

「コナン君、哀ちゃん！ジェットコースター次よ…。」
大声で叫ぶ。

コナン

「あつ、そうだったなあ。哀行くぞ！」

哀

「ええ…。」

コナンと哀は蘭と先生の近くまで走った。

今、2カップルは新たなスタートを切った。

最初の一步、それは告白する事から始まった。

此からは、恐らく色んな苦難が待ち受けているだろう。――しかし、
此の2カップルなら其れも乗り越えられる筈。

蘭と新出先生は、新たな恋愛へと…

コナンと哀には小学生生活のやり直し

そして、淡い恋愛のスタート

――それぞれの恋愛が今、此の地に託された。

2カップルの関係はまだ淡いまま

でも、此から深めていく。此のかけがえの無い恋愛を…

” 此処までのエピソードは全て蘭の存在から始まった。
”

新しいスタートに向かって（後書き）

ごめんなさい。矛盾点ざっくりかもしれません。こんな駄文小説ですが読んでくださった方有難う御座いますm（| |）m
設定が有り得ないような気がします

っていうか猛スピードで書いたから文章とかめちゃくちゃかもf^

| ^ ;

本当にあらゆる点で御免なさい

では、評価してくださいと嬉しいです¥（^ | ^） /

評価に対する返信はテストが終わってからします

今、テスト前なんで（^ | ^ ;）

***あとがき*（前書き）**

これで終了です。コ哀と蘭と先生をもっともっと幸せにして欲しい
と云う方がいましたらすみません

続編考えておきます

一応、幸せになる第一歩っていうことで...

本当に御免なさい

あとがき

えっと、この『哀しげな天使からの淡い恋愛』っていう駄文小説を書いている作者の彩乃です（＾Ｏ＾）／

こんな作者のぐだぐだ話なんか『どうでもいいんだよ…!!』っていう方とばしていただけてもいいですよ

本編とはまっくたく関係ありませんから（-|-#）

ちよつとの間、駄文&コ哀小説に付き合っていただけで本当に嬉しいです（*＾o＾）又（＾-＾*）

初めての連載なんとか完結させました

感無量ですう（———）

先ずね、この話はコナン×哀ベースですネ（*u|u）

でも、でも、それだと『蘭がコナンつまり新一を待っているから…』

…コナン×哀は無理があるんですね。』

そこで蘭は新一と結ばれることをきっぱり無くそうと思ったんです

≡

（まさかコナンが二股かけるわけないですし）

でも、蘭だって待っていた新一が傍から居なくなると悲しむに決まっている

コナン×哀っていうのも責任重大ですよ

（ノー。。）

コナン×哀だったら何でもいいっていうわけでもないですから・・・やはり蘭の事も考えてコナン×哀にしないと蘭がかわいそうすぎますしね

そ*こ*で私は蘭を幸せに出来るのは新出先生かなあと思って考えて見ました

きつと、きつと新一の代わりになる大切な人は居る筈何ですよ〜

(*)

そして、蘭には告白させました。(* ^ . ^) 。告白するの早すぎるけど、でも新一と同じぐらい大切な人なら好きになるのも早いんですよ。(< | >)

そして、蘭たちに続いて告白するコナンと哀も書きたかったんです
(# ^ - ^ #)

何だか作者のひとりよがり&願望をいつていますネ
すいませんm (| |) m

まあ何がともあれ取りあえず完結させました
ちよっとほっとしました

皆さん、有難う御座いますm (| |) m
ひよっとしたら此の小説続編有るかもしれません。

作者の気まぐれで：

こんな中途半端な終わり方でいいのでしょうか？続きを期待していた方すみません

ここはこんな終わり方しか出来い作者でしてあらゆる点ですみません

続編書くとしてもいつかわかりません。

構想全く無しですし、学業でめちゃくちゃ忙しいですし、迷っています

あらゆる点で御免なさい↑くどい

続編考えておきます

2月7日彩乃

***あとがき*（後書き）**

言い訳ばかりのあとがき御免なさい

一応、暇を見つけて続編書くことを考えておきます
って云つてもまだ全く考えてありませんが、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4043b/>

哀しげな天使からの淡い恋愛

2010年10月12日03時40分発行